

三宅義夫

『マルクス・エンゲルス／イギリス恐慌史論』

大月書店 1974.3; 9 xiv, 412 ページ; vi, 312, 28 ページ

本書は、マルクスとエンゲルスが、当時のイギリスを中心とする資本主義諸国の、恐慌を頂点とするさまざまな景況について述べている諸記述を収録し、それについて必要な考察を加えたものである。内容は、1847年恐慌とその勃発にいたる経過とを見た第1篇、1857年恐慌にいたる循環過程を見た第2篇(以上、上巻)、1866年恐慌にいたる循環過程を見た第3篇、1870年代以降の循環過程を見た第4篇、それに、J. クチンスキーの中間恐慌論を批判した付論(以上、下巻)、から成っている。

著者は本書で、マルクスとエンゲルスの両人が同時代人として目前にしていた当時の資本主義社会の経済の動き、とくに景気変動をどのように観察し、記述していたかを、子細に追求しようとしているのであるが、著者がこのような作業を必要と考えたひとつの大きな理由は、この作業によってこそ、『資本論』の枠外に残された「資本の現実の運動」、とりわけ「世界市場の大暴風雨」たる恐慌について、両人がどのようなことを考えていたのかを窺うことができるであろう、と考えられたからであった。言うまでもなく、この課題は、産業循環や恐慌にふれている両人の記述を網羅的に集めてそれらを時期順に並べるということだけで果たせるものではない。著者は、個々の記述では直截には述べられていない、両人の脳裏にあったと見られる諸表象、諸記述のあいだに潜んでいる内的なつながり、などを探り出すという、困難な仕事に取り組まねばならなかった。

著者は、『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』収録論説の未公開の英文原文を含めて、可能なかぎり原文にあたり、全引用を自ら訳出し、それらにたいしてさまざまな視点から考証を加えていく。その中心は両人の見解を正確にとらえてその変遷の跡を辿ることにあるが、このいわば本筋をなす考察を、あるいは補強しあるいは補足するものとして、著者はいたるところでそのときどきに気付かれた考証的事項を煩をいとわず注記している。それは、誤記と思われる個所や理解しがたい個所の指摘、手紙などにみられる舌たらずの叙述から生じうる誤解にたいする注意、個々の記述の執筆時期や先後関係の推定、各版本の誤植、誤った注解、編集上の不手際などの指摘、

英文からの独訳本に見られる不適訳の指摘など、多岐にわたり、詳細をきわめている。これらの夥しい考証を見て痛感させられるのは、とくに時論的な論説の場合にそうなのであるが、個々の記述について慎重な取り扱いを要するケースがきわめて多い、という事実であり、じっさい、本書の考証で従来の誤った読み方が訂正された例が少くないのである。マルクスの論説といえども、ときとして、混乱や誤りを含みそのままでは読みに耐えぬようなものがあるのであって、その例としては、1855年5月19日付論説「金融事情」(本書上巻、180—190 ページ)——これはかつて、「現在にとってもきわめて重要な材料を含む」時論として、„Kleine ökonomische Schriften“(1955)に収録されたことさえある——や、1868年11月9日付論説「グラッドストン氏の1866年のイングランド銀行宛の書簡はいかにして500万ポンドの借款をロシアに獲得させたか」(下巻、110—120 ページ)、などをあげることができよう。

さて、このような微細にわたる考証を伴いながら、両人の見解の軌跡が克明に辿られていく。循環の周期についての両人の見解はどのように変わっていくか、革命をもたらすものとして待望され予測された恐慌はどうなり、両人は事後どのように評価しているか、両人の見解のあいだに相違はなかったか、あるとすればそれはどんな事情から生じたのか、等々、興味ぶかい問題が繰り返してていねいに跡づけられている。なかでも印象的なのは、1870年代以降の循環過程についての両人の見解の変遷であって、端的に言えば、両人はついに、自ら十分に納得しうるような諸局面の時期的確定(Datierung)に到達しえぬままに世を去ったのではないか、と思われるのである。シュビートホフのいう「不況的大周期」たる1874—94年は、景気観察にはおそらくあまり適さない時代だったのであろう。1894年に死去したエンゲルスは、その晩年、短期間の弱々しい好況にたいして深刻な「慢性的不況」が長く続くこの時期をどのように説明するのか、いささか迷っていたように見受けられる。エンゲルスは1882年から「中間恐慌」の規定を打ち出すようになるが、この中間恐慌も、本書の著者によればエンゲルスが「やや混乱しているのではないかと思われる形跡が窺われる」1884年頃になると、どの時期をもってそれにあたるとすべきかについて、見方が変わっていくように思われるのである。(ちなみに、クチンスキーの「中間恐慌論」の数々の誤りも、一部は、本書でなされているような慎重な考証を抜きにしてエンゲルスの個々の叙述を平面的に並べてものを言うことに結びついている。本書の「付

論」はそのことを明らかにしている。) 総じて、1870年代以降の産業循環の各局面の Datierungen は、両人の死後に残された課題となったと見ることができるであろう。

このようにして本書に立ちいっていくと、われわれは、本書がまさしくこの著者のものであることを思い知らされる。注意力を不断に緊張させながら煩瑣な考証作業を持続していく根気、たえず縦横に走る連想能力とそれを生かすだけの記憶力、両人の時論的記述の背後にある理論的見解を正確にとらえうる理論的蓄積、歴史上の事実についての知識、そしてなによりも、この作業にたいする強い好奇心、——これらのもののうちのどれかひとつが欠けただけでも、本書が成り立つことはなかったであろう。けれども、この著者によってのみなしとげられえた執拗な考証という本書の特徴が、その反面で、本書をかなり読みづらいものにしていることは否めない。本文での叙述の流れには直接にはかかわりのないような考証的事項が、括弧づきの挿入や付注としてしばしばはいりこんでくる。それらは本文の理解に必要なものと区別されてはいないので、簡単に読み飛ばすわけにもいかない。そこで読者は、多大の努力と忍耐とを強いられることになる。本書はもともと、当時の経済史、両人の恐慌理論の発展過程、両人の生涯と諸文献、——これらのもののすべてについてある程度まで通曉しているのでなければたやすく通読できるものではないのであるから、それに加わるこの事情は軽視しえないものである。

つまり本書は、軽々しく「良書だから一読を」と薦めることができるようなたぐいの書ではなく、これにつく読者にも一定の心構えが要求されるのである。けれども他方、豊富な内容をもつ本書は、さまざまな観点からする問いかけに答える用意をもっているのであって、その意味では、本書は高度の研究書であるばかりでなく、マルクスとエンゲルスの恐慌論に関心をもつ者にとって、手放しがたい reference book であるといえよう。

そこで、そのようなものとして本書を見ると、巻末の付録——Ⅰ. 両人の著書・論説の索引、Ⅱ. 両人の書簡の索引、Ⅲ. イングランド銀行のバンク・レートの一覧表——は、いかにも不十分の感を免れない。Ⅰ. の索引には『資本論』や『経済学批判』などが含まれていないのであるが、これらについての索引こそ、『資本論』研究に本書を直接に役立たせるためにぜひとも望まれるものである。また、イングランド銀行のバンク・レートを掲げるのであれば、あわせてロンドン市場での市場割引率の変遷をも——グラフで——掲げてほしかった。(なお、

第4篇だけはその冒頭に3つのグラフが置かれているが、これによって第4篇は格段に読み易くなっているのである。) そのほか、著者は必要に応じて、“Parliamentary Papers” や、Bagehot, Bernstein, Clapham, Evans, Gilbert, Gregory, Henderson, Hughes, Macleod, Mitchell, Powell, Hans Rosenberg, Spiethoff, Thomas, Tugan-Baranowsky, Varga, Watts, 等々の著書を引用し、また言及しているのであるから、文献索引と人名索引とはとうぜん付されてしかるべきものであった。さらに、もし本書に事項索引が(必要なものには原語をつけるなどの工夫をして)作成されたならば、本書利用の便宜も、したがってまた読者の層も、ぐっと広げられることになるであろう。本書の改訂のさいには、これらの索引類の追加をも検討されるよう、著者と出版社に希望したい。

ところで、本書の全体を通じていまさらながら強く印象づけられるのは、マルクスとエンゲルスがいつでも、資本主義的生産の周期的な盛衰の各局面を労働者階級の状態および革命の展望と結びつけて観察し、論じていたのだ、ということである。著者も、「マルクス、エンゲルスの記述はこんにちの現実分析のさいに大きな示唆に富むものとして役立たせうるし、またそれによって理論を充実し、発展させることが図られねばならない」(あとがき)、という問題意識をもって本書を書きすすめているのであって、読み手もまた、このような現代との接点をたえず求めながら本書を利用し、あるいは検討する必要があるであろう。そしてそのさい、著者が、1870年代以降の時期の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解には、「恐慌の理論的研究にとって、恐慌の発現形態が時代によって変容するという問題のほか、私としては、より本質的に重要な問題も若干伏在しているように考えられる」(下巻、159ページ)、と言われるさいの、「より本質的に重要な若干の問題」とはどのような問題であるのかを考えていくことが、ひとつの大きな手がかりとなるように思われる。

【大谷 禎之介】

阿 部 真 也

『流通行動と物価騰貴』

ミネルヴァ書房 1974. 11 354 ページ

(流通経済学選書 1)

序章を含む5編16章より成る本書は、著者が多年独